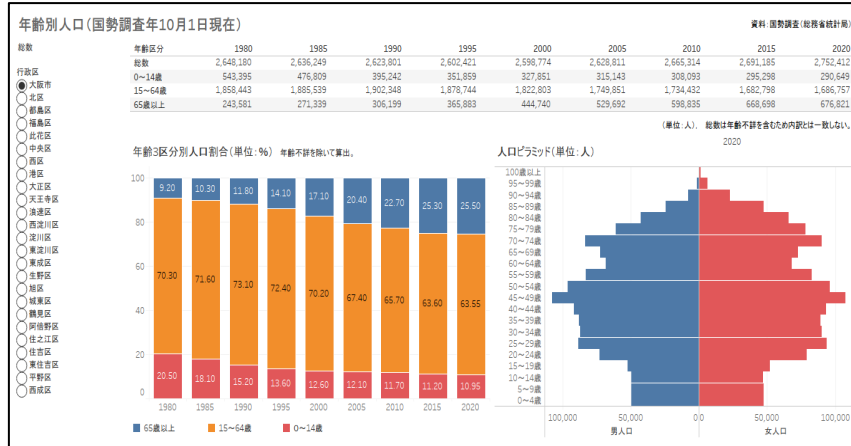


ダッシュボードの利用例

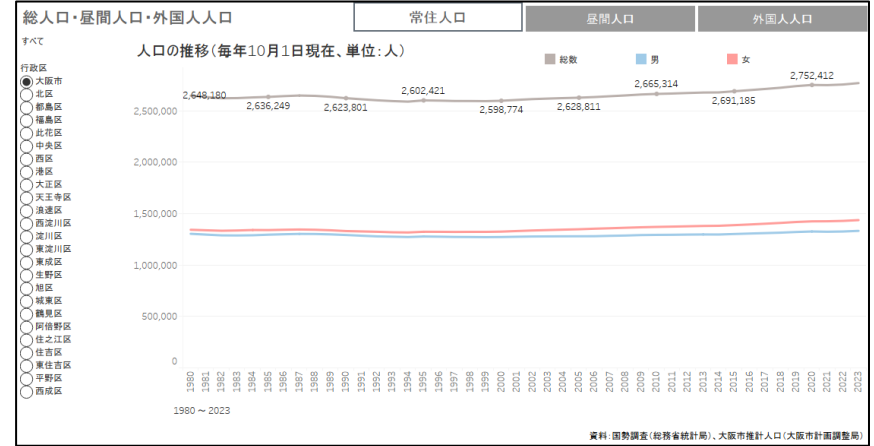
令和 6 年 3 月
大阪市 計画調整局

本市の統計データをグラフ等で可視化し、分かりやすくまとめたダッシュボードを[大阪市オープンデータポータルサイト](#)に次のとおり公開しています。

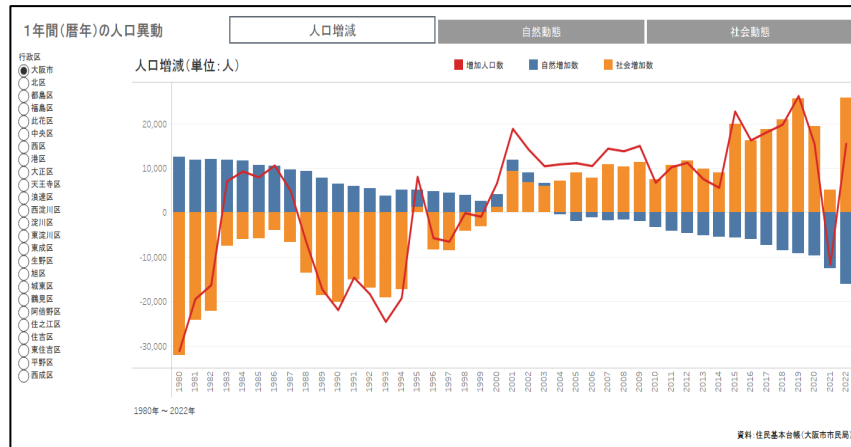
【年齢別人口】



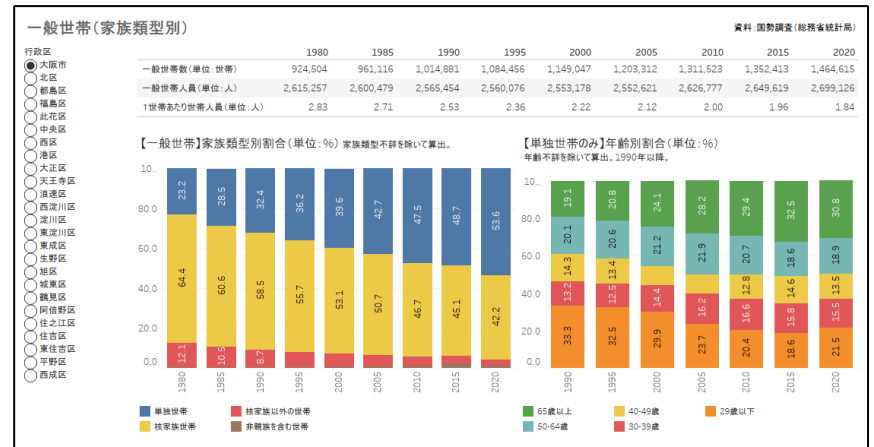
【総人口・昼間人口・外国人人口】



【1年間(暦年)の人口異動】



【一般世帯(家族類型別)】



上記ダッシュボードのうち、「年齢別人口」、「1年間(暦年)の人口異動」、「一般世帯(家族類型別)」の3つのダッシュボードの利用例を次ページ以降で紹介します。

1 「年齢別人口」のダッシュボード

(1) 大阪市全体の現在と過去の比較

まず、大阪市全体の年齢別人口の状況をみていきましょう。図1及び図2は大阪市全体の年齢別人口のダッシュボードです。

年齢3区分別人口割合のグラフから、大阪市全体では1980年から2020年にかけて0～14歳及び15～64歳の人口割合は減少し、65歳以上の人口割合が増加していることが分かります。

また、図1の人口ピラミッドは2020年のもの、図2の人口ピラミッドは1980年のものです。

両者を比較すると1980年の人口ピラミッドは2020年の人口ピラミッドよりも65歳以上の人口少なく、24歳以下の人口が多くなっており、人口構造の違いがみえます。

図1 大阪市全体の年齢別人口ダッシュボード（人口ピラミッド2020年）

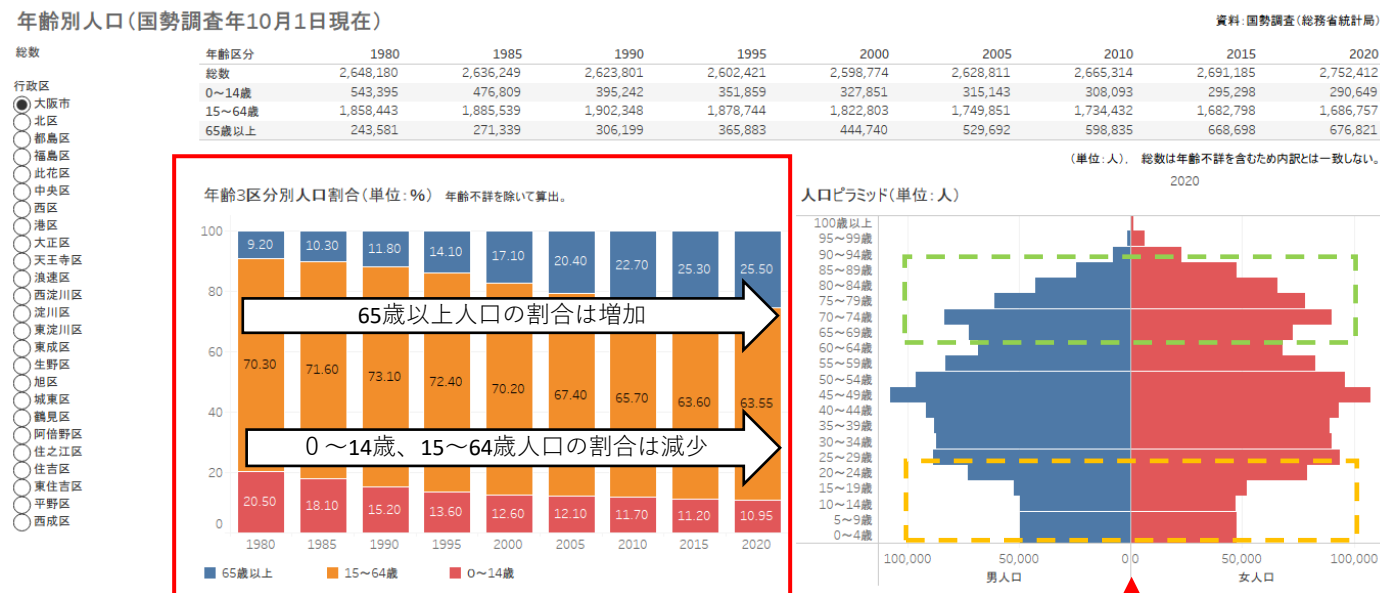
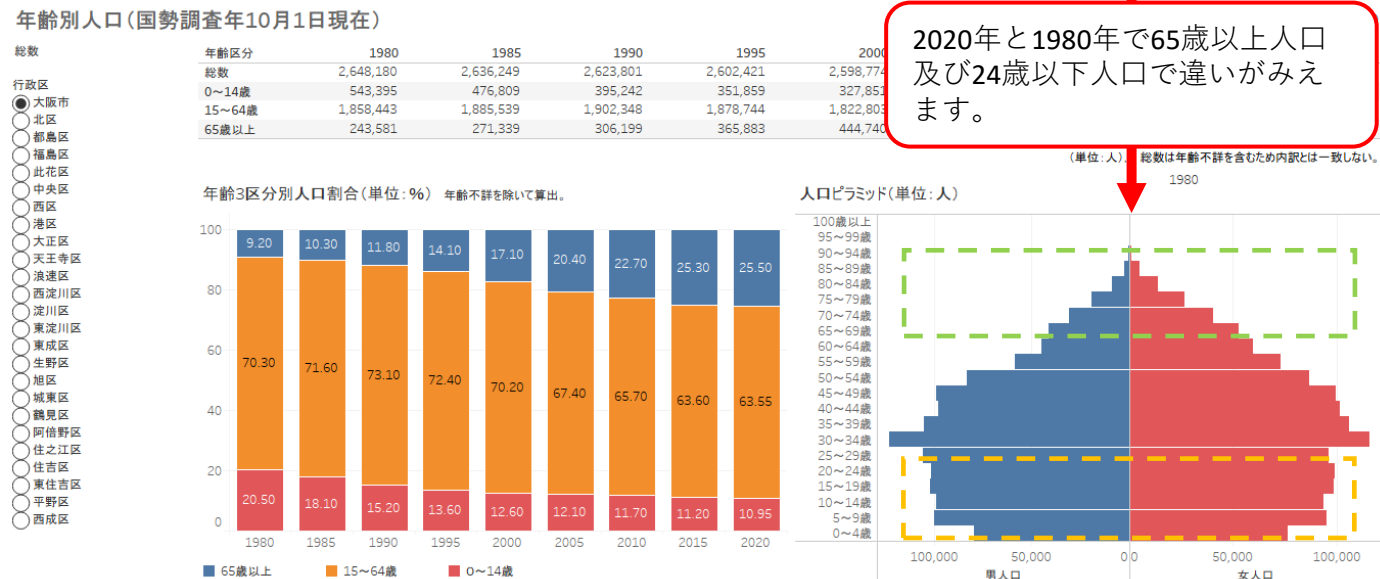


図2 大阪市全体の年齢別人口ダッシュボード（人口ピラミッド1980年）



1 「年齢別人口」のダッシュボード

(2) 大阪市全体と行政区の比較

次に大阪市全体と行政区の状況を比較します。北区の年齢別人口のダッシュボードを例にみましょう(図3)。年齢3区分別人口割合のグラフから、北区は1980年から2020年にかけて15～64歳人口の割合は、65歳以上人口の割合及び0～14歳人口の割合と比べて変動が小さく、また図1の大阪市全体と比較して、15～64歳人口の割合が高くなっていることが分かります。

2020年の人口ピラミッドを比較すると、北区の人口ピラミッドと大阪市全体の人口ピラミッドではその形状が異なっており、両者の年齢構成の違いが鮮明になっています。

図3 北区の年齢別人口ダッシュボード(人口ピラミッド2020年)

年齢別人口(国勢調査年10月1日現在)

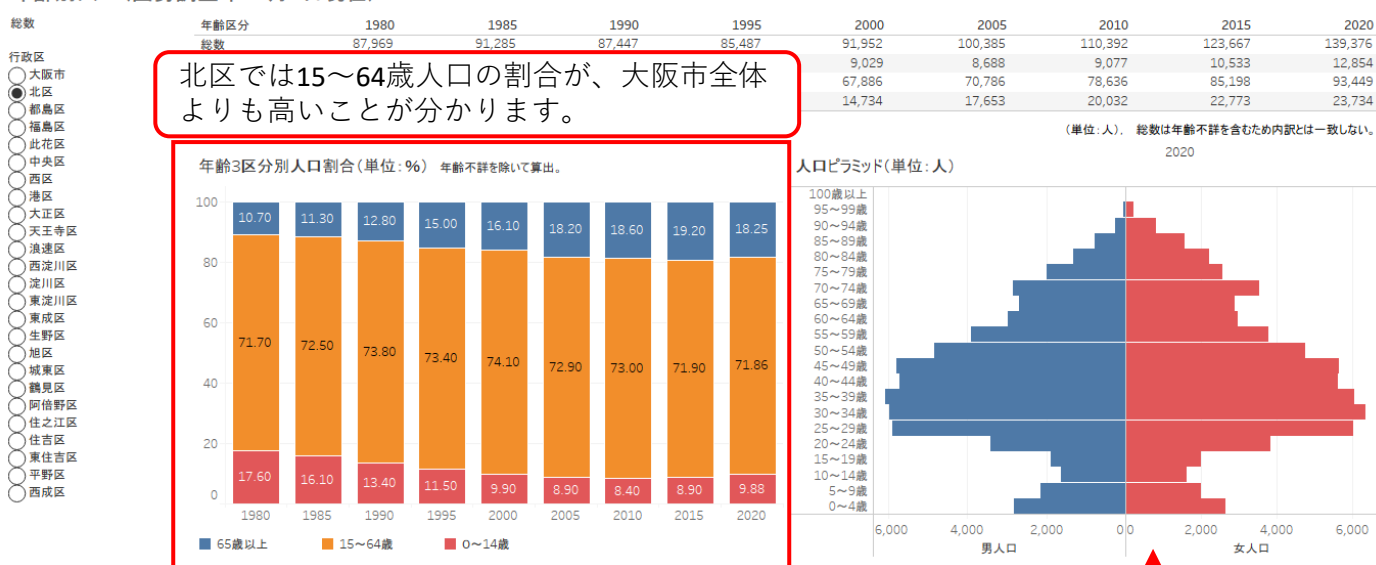
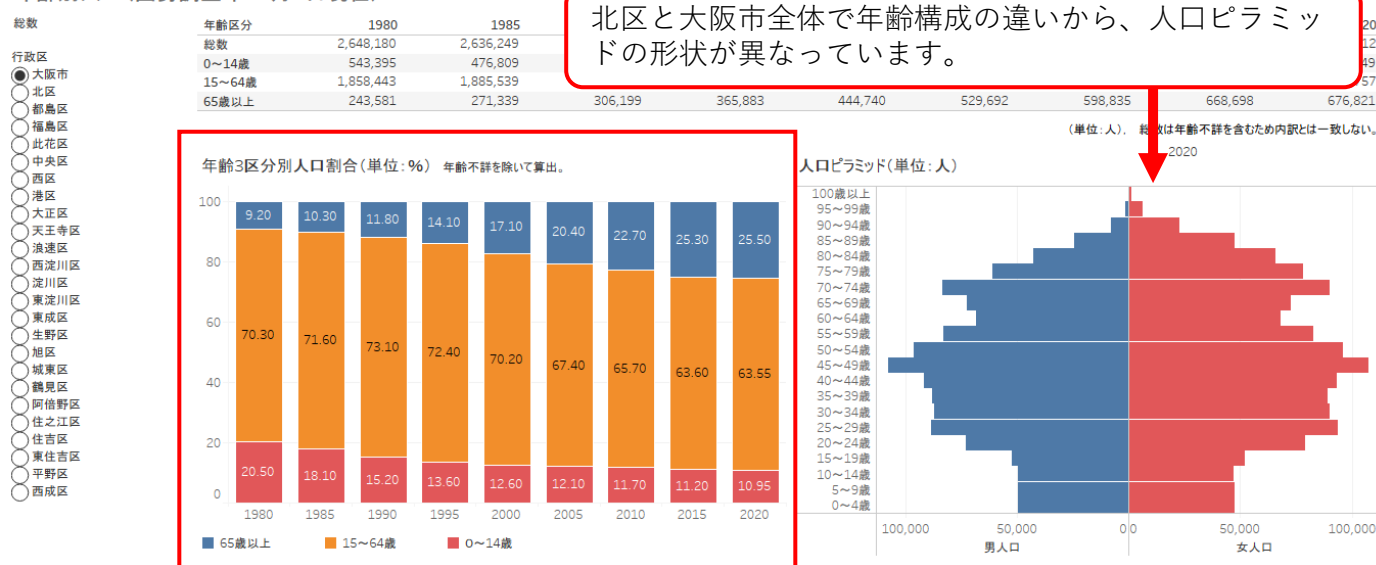


図1(再掲) 大阪市全体の年齢別人口ダッシュボード(人口ピラミッド2020年)

年齢別人口(国勢調査年10月1日現在)



1 「年齢別人口」のダッシュボード

(3) 行政区の現在と過去の比較

次に行政区の現在と過去の状況を比較していきます。例えば平野区の現在と過去の動向をみましょう。図4は平野区の年齢別人口のダッシュボードです。年齢3区分別人口割合のグラフから、2010年以降は大阪市全体と比較して65歳以上人口の割合が高く、大阪市全体よりも高齢化が進んでいることが分かります。

2020年の人口ピラミッドを比較すると、平野区は高齢化が進んでいることから、大阪市全体と比較して、上部、特に70歳から89歳が厚い形状となっています。

続いて、同じ平野区で2020年と1980年の人口ピラミッドを比較してみます。

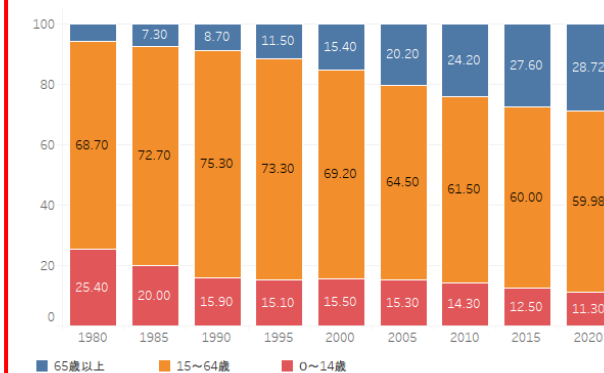
図4 平野区の年齢別人口ダッシュボード（人口ピラミッド2020年）

年齢別人口(国勢調査年10月1日現在)

行政区
○ 大阪市
○ 北区
○ 都島区
○ 福島区
○ 此花区
○ 中央区
○ 西区
○ 港区
○ 大正区
○ 天王寺区
○ 浪速区
○ 西淀川区
○ 淀川区
○ 東淀川区
○ 東成区
○ 生野区
○ 旭区
○ 城東区
○ 鶴見区
○ 阿倍野区
○ 住之江区
○ 住吉区
○ 東住吉区
● 平野区
○ 西成区

平野区では2010年以降、65歳人口の割合が、大阪市全体よりも高いことが分かります。

年齢3区分別人口割合(単位:%) 年齢不詳を除いて算出。



資料: 国勢調査(総務省統計局)

	2000	2005	2010	2015	2020
総数	201,722	200,678	200,005	196,633	192,152
0~14歳	31,225	30,680	28,494	24,207	21,032
15~64歳	139,487	129,243	122,469	116,351	111,618
65歳以上	30,970	40,394	48,180	53,454	53,440

(単位:人)、総数は年齢不詳を含むため内訳とは一致しない。

人口ピラミッド(単位:人)

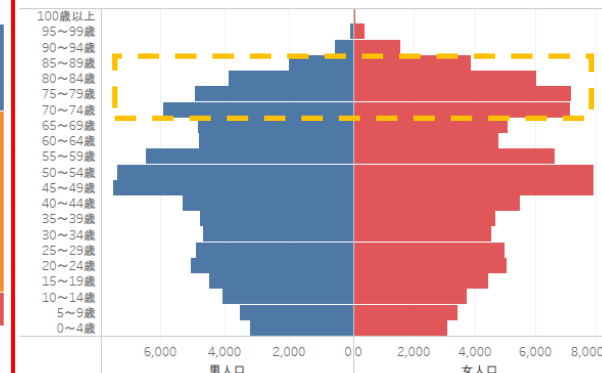


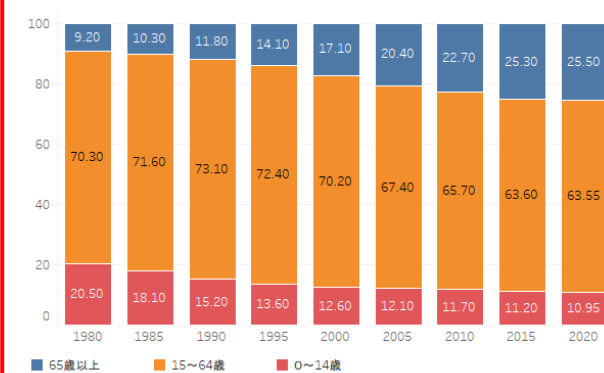
図1 (再掲) 大阪市全体の年齢別人口ダッシュボード（人口ピラミッド2020年）

年齢別人口(国勢調査年10月1日現在)

行政区
● 大阪市
○ 北区
○ 都島区
○ 福島区
○ 此花区
○ 中央区
○ 西区
○ 港区
○ 大正区
○ 天王寺区
○ 浪速区
○ 西淀川区
○ 淀川区
○ 東淀川区
○ 東成区
○ 生野区
○ 旭区
○ 城東区
○ 鶴見区
○ 阿倍野区
○ 住之江区
○ 住吉区
○ 東住吉区
○ 平野区
○ 西成区

年齢区分	1980	1985	1990	1995
総数	2,648,180	2,636,249	2,623,801	2,602,421
0~14歳	543,395	476,809	395,242	351,859
15~64歳	1,858,443	1,885,539	1,902,348	1,878,744
65歳以上	243,581	271,339	306,199	365,883

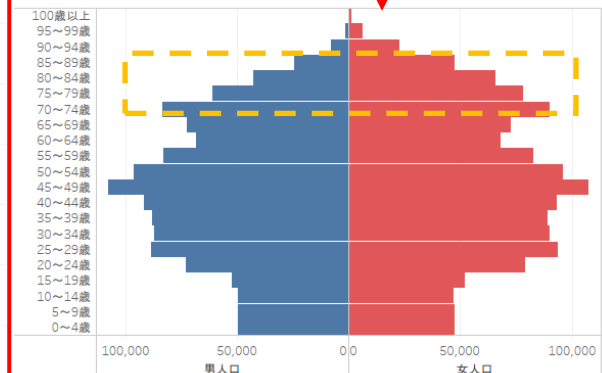
年齢3区分別人口割合(単位:%) 年齢不詳を除いて算出。



平野区の人口ピラミッドは大阪市全体よりも上が大きい形状となっています。

(単位:人)、総数は年齢不詳を含むため内訳とは一致しない。

人口ピラミッド(単位:人)



1 「年齢別人口」のダッシュボード

(3) 行政区の現在と過去の比較

図5の人口ピラミッドは平野区の1980年のものです。30歳から54歳の各5歳階級が他の階級と比べて厚くなっています。

前ページで2020年の平野区の人口ピラミッドは上部、特に70歳から89歳が厚くなっていることを述べましたが、人口ピラミッドを比較することで、1980年に層の厚かった30歳から49歳の年齢階級が、40年後の2020年において70歳から89歳の年齢階級にスライドしていることが分かります。

図4 (再掲) 平野区の年齢別人口ダッシュボード (人口ピラミッド2020年)

年齢別人口(国勢調査年10月1日現在)

資料: 国勢調査(総務省統計局)

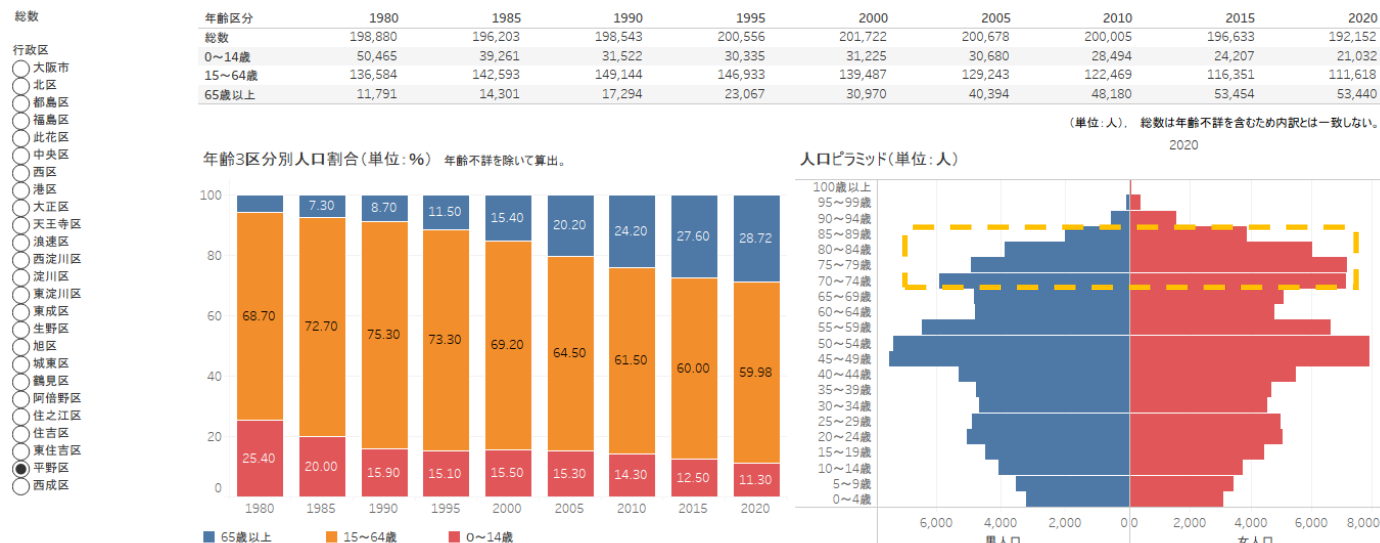
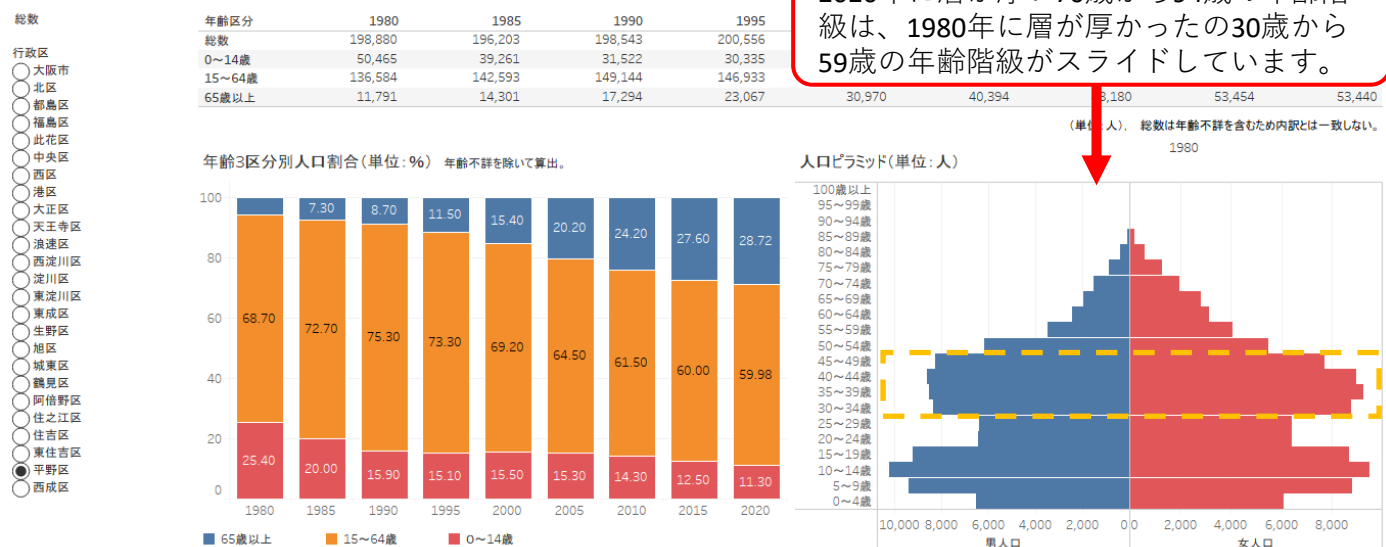


図5 平野区の年齢別人口ダッシュボード (人口ピラミッド1980年)

年齢別人口(国勢調査年10月1日現在)

2020年に層が厚い70歳から94歳の年齢階級は、1980年に層が厚かった30歳から59歳の年齢階級がスライドしています。



以上のように、「年齢別人口」のダッシュボードでは大阪市全体及び各行政区の年齢別人口の状況、年次推移をみることができ、時点による比較、行政区別の比較をすることが可能です。

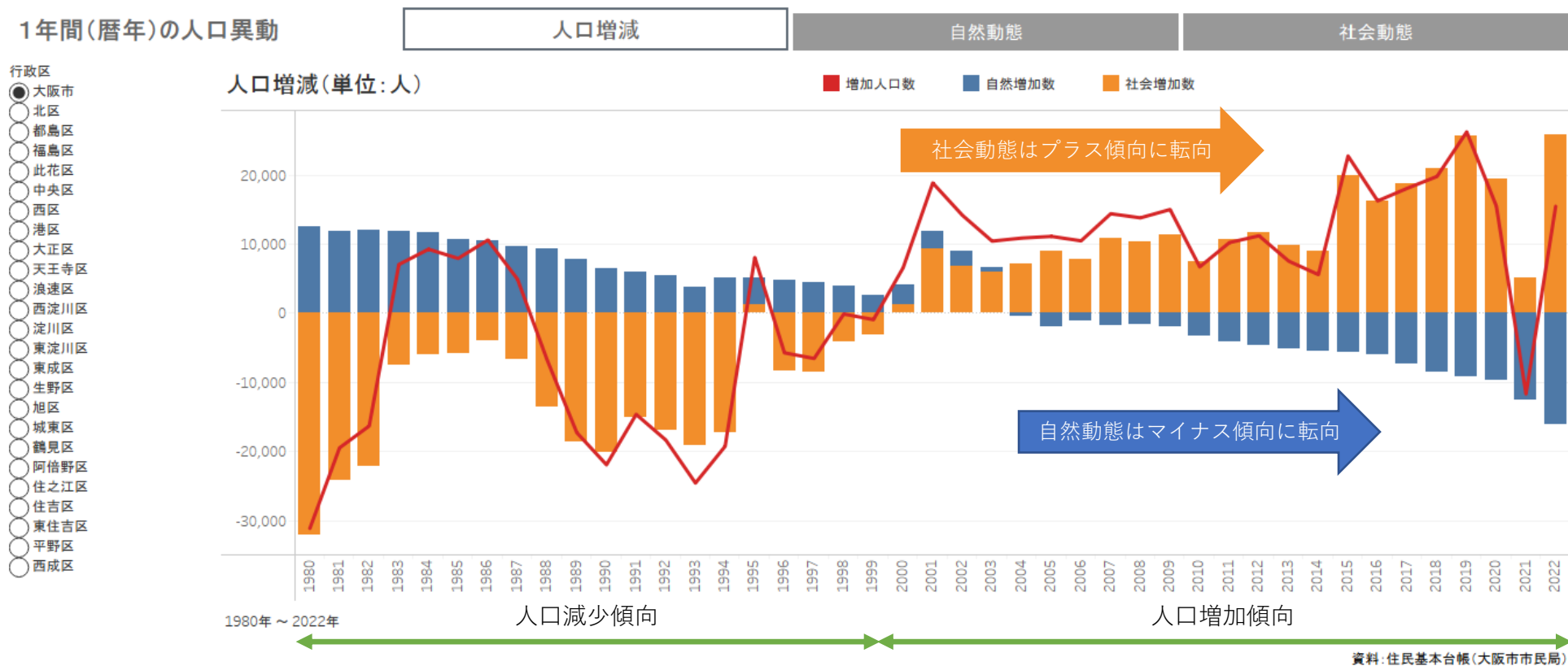
2 「1年間（暦年）の人口異動」のダッシュボード

（1）大阪市全体の人口異動の状況

図6は大阪市全体における1年間（暦年）の人口異動のダッシュボードです。本市の人口の長期的推移をみると、1980年代半ばには増加している時期もありましたが、1999年までは減少傾向が続き、2000年から増加傾向に転じたことが分かります。

また、人口増減の要因となる自然動態と社会動態から人口の動向をみると、自然動態は2003年まではプラスでしたが、2004年以降はマイナスに転じ、社会動態は1999年まではマイナス傾向でしたが、2000年以降は増加に転じており、自然動態がマイナスに転じた2004年以降の人口増加は社会動態の増加によるものと分かります。

図6 大阪市全体の人口異動ダッシュボード



2 「1年間（暦年）の人口異動」のダッシュボード

（2）行政区の人口異動の状況

次に行政区における人口異動の状況をみていきます。浪速区（図7）と西区（図8）を例にみましょう。

浪速区の人口は大阪市全体と同じ2000年に増加傾向に転じています。

増加傾向に転じた2000年以降の自然動態と社会動態をみると、自然動態は一貫してマイナスですが、社会動態は自然動態のマイナス幅を上回る増加のため、人口増加となっています。

西区の人口は大阪市全体の人口が増加に転じた2000年よりも早い1995年から増加傾向にあります。

自然動態と社会動態の動向を見ると、自然動態は1980年以降、一貫してプラスであり、人口が増加傾向に転じた1995年以降、社会動態がプラス傾向に転じたことが要因にあることが分かります。

以上のように、「1年間（暦年）の人口異動」のダッシュボードでは大阪市全体及び各行政区の人口増加の状況、自然動態及び社会動態をみることができ、人口増減の要因を自然動態と社会動態の動向の面から確認することが可能です。

図7 浪速区の人口異動ダッシュボード

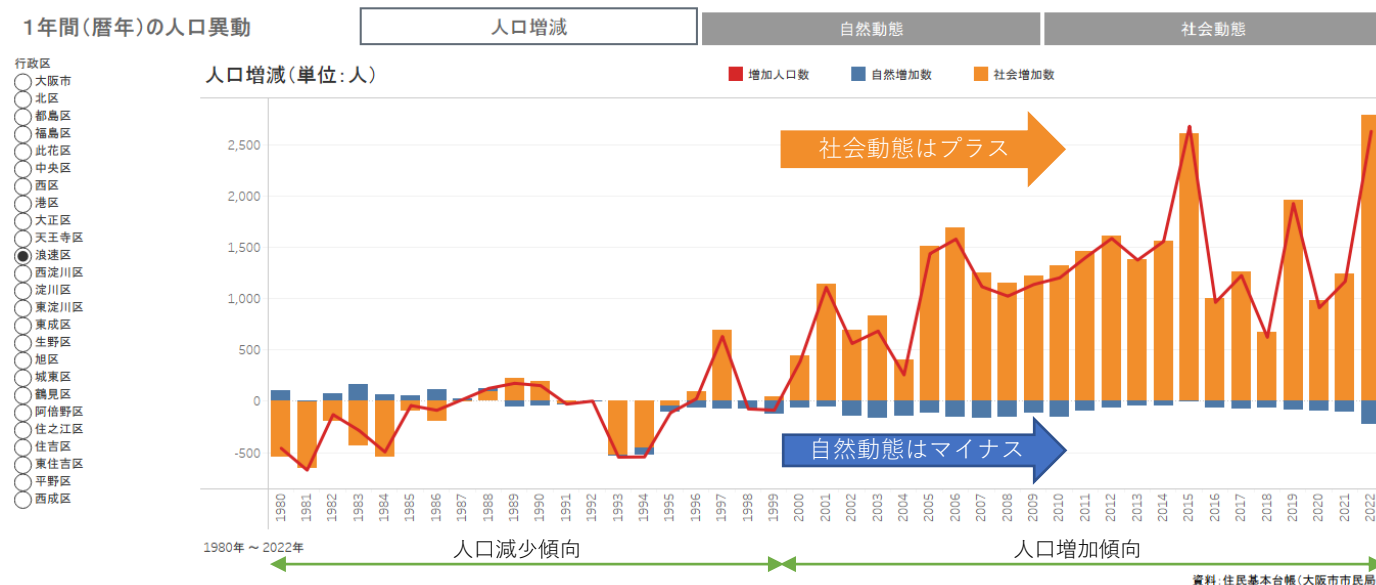
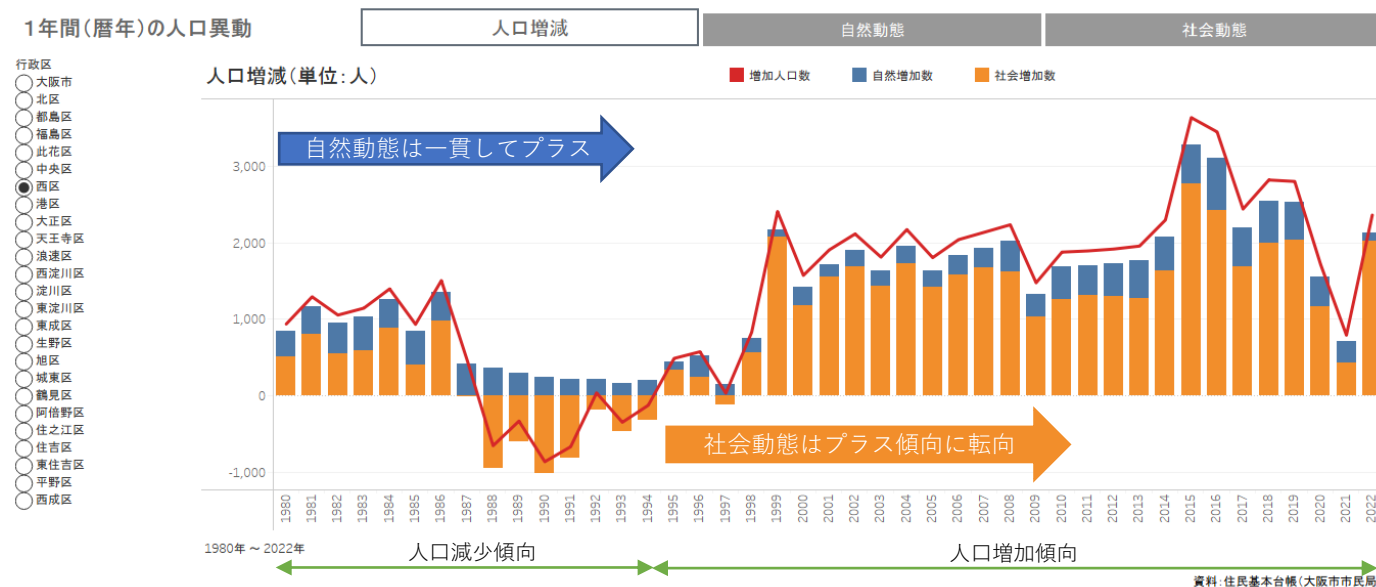


図8 西区の人口異動ダッシュボード



3 「一般世帯（家族類型別）」のダッシュボード

(1) 大阪市全体の一般世帯（家族類型別）の状況

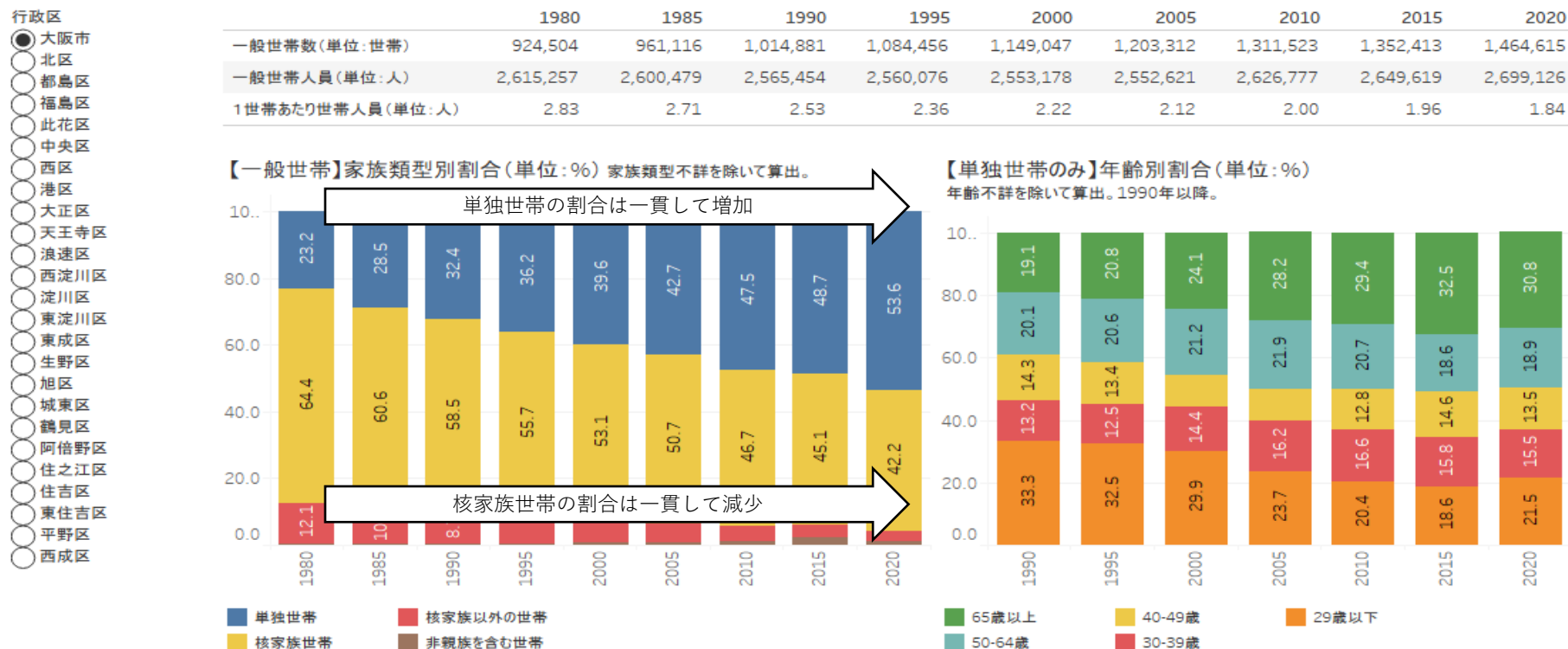
図9は大阪市全体の一般世帯（家族類型別）のダッシュボードです。家族類型別割合をみると1980年は核家族世帯の割合が最も高く、次いで単独世帯の割合が高かったところ、その後、核家族世帯の割合は一貫して減少する一方、単独世帯の割合は一貫して増加し、2010年以降は単独世帯の割合が最も高くなっています。

また、単独世帯の年齢別割合をみると、65歳以上の割合は増加傾向、29歳以下の割合は減少傾向にあるところ、他の年齢階級の割合は65歳以上及び29歳以下の割合と比較して、変動が小さいことが分かります。

図9 大阪市全体の一般世帯（家族類型別）ダッシュボード

一般世帯(家族類型別)

資料：国勢調査（総務省統計局）



3 「一般世帯（家族類型別）」のダッシュボード

(2) 大阪市全体と行政区の比較

次に大阪市全体と行政区の状況をみていきます。例えば、図10は中央区の一般世帯（家族類型別）のダッシュボードです。

中央区の家族類型別割合をみると、単独世帯の割合が大阪市全体よりも高くなっていることが分かります。

単独世帯の年齢別割合をみると1990年は中央区と大阪市全体とで同じような構成となっていて、中央区では2000年以降、39歳以下の割合が増加傾向となり、2005年以降は39歳以下の割合が約50%となっています。

大阪市全体では1990年以降、39歳以下の割合は減少傾向にあり、中央区と大阪市全体で傾向に違いがみられます。

図10 中央区の一般世帯（家族類型別）ダッシュボード

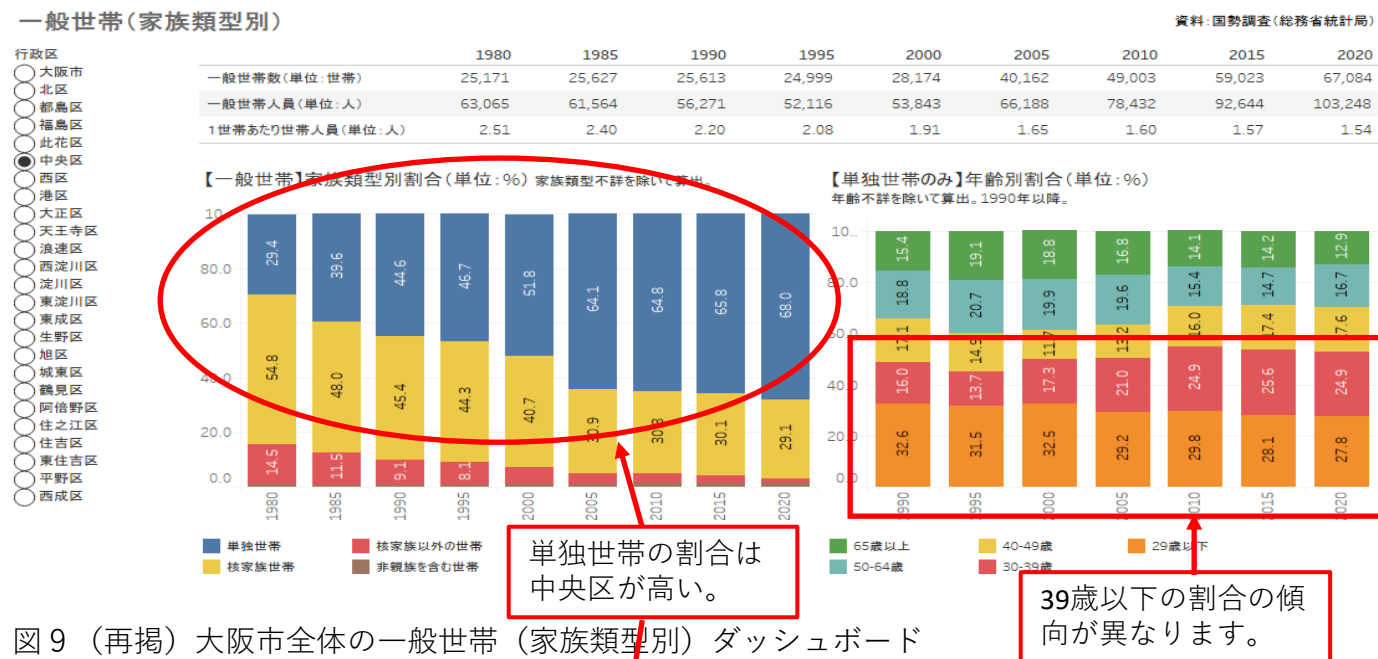
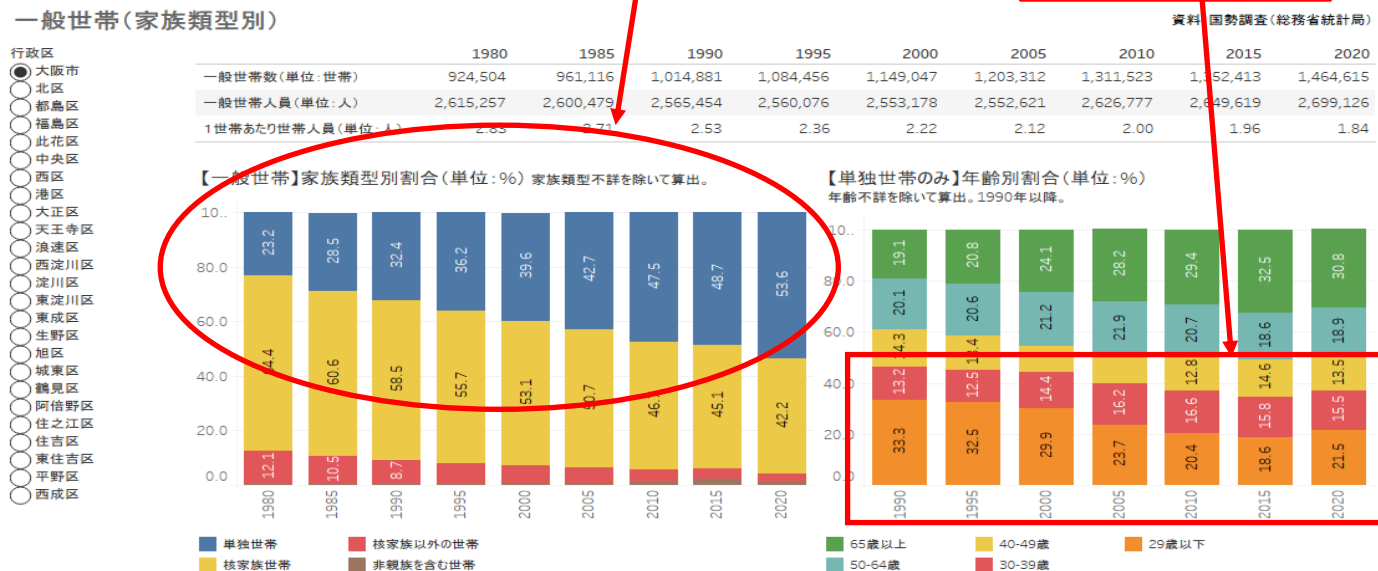


図9 (再掲) 大阪市全体の一般世帯（家族類型別）ダッシュボード



3 「一般世帯（家族類型別）」のダッシュボード

(2) 大阪市全体と行政区の比較

前ページの中央区と状況が異なる例として鶴見区の状況をみていきます（図11）。

鶴見区の家族類型別割合の推移をみると、1980年以降、大阪市全体の傾向と同様に単独世帯の割合は年々増加しているものの、一貫して核家族世帯の割合が最も高くなっています。

核家族世帯の割合が高いことから、1世帯あたり世帯人員も大阪市全体と比較して多くなっています。

単独世帯の割合をみると、65歳以上の割合がいずれの年も大阪市全体より高くなっています。

図11 鶴見区の一般世帯（家族類型別）ダッシュボード
一般世帯（家族類型別）

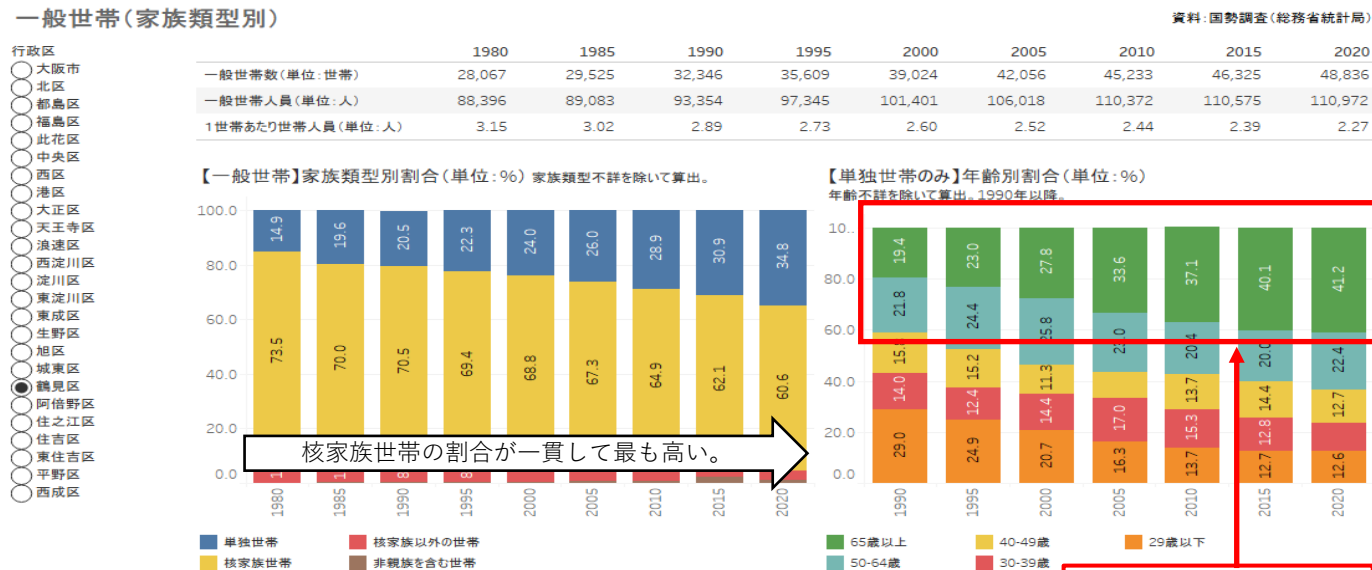
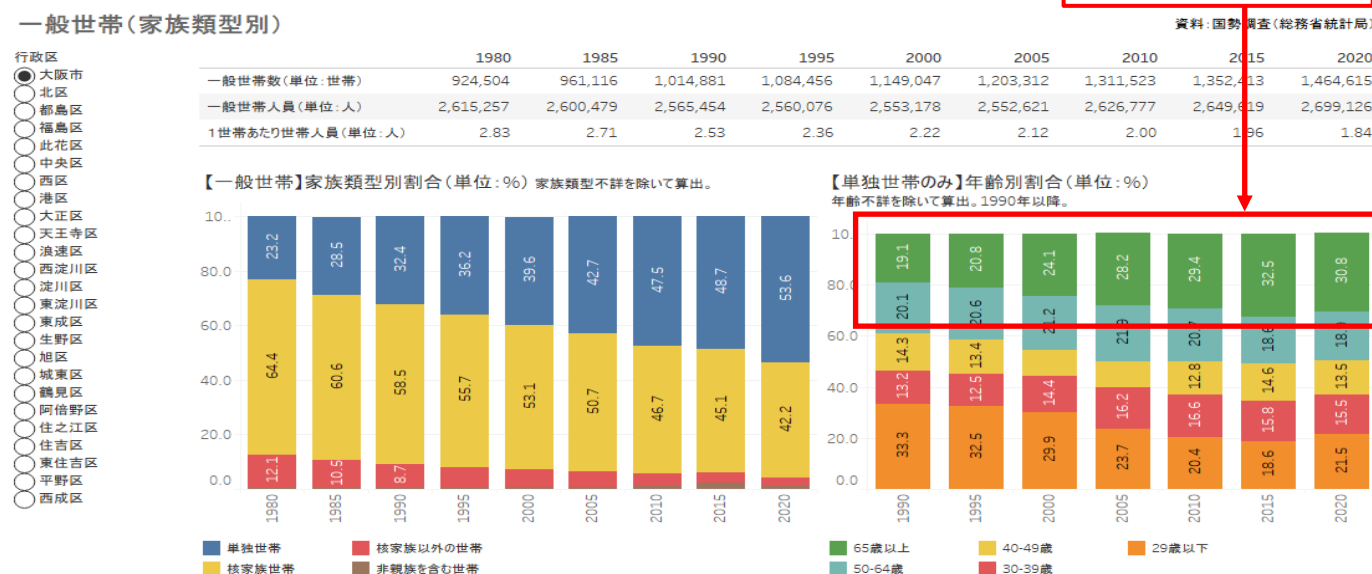


図9（再掲）大阪市全体の一般世帯（家族類型別）ダッシュボード



3 「一般世帯（家族類型別）」のダッシュボード

(3) 行政区同士の比較

次に行政区同士で一般世帯（家族類型別）のダッシュボードを比較してみます。

西成区（図12）と中央区（図10）の2区の状況を例にみましょう。

西成区と中央区のそれぞれの家族類型別割合をみると、似た構成となっており、単独世帯の割合も近い数値となっています。

しかし、単独世帯の年齢別割合をみると、西成区と中央区とで異なっており、西成区は一貫して50歳以上の割合が高くなっており、中央区は一貫して49歳以下の割合が高くなっています。

図12 西成区の一般世帯（家族類型別）ダッシュボード

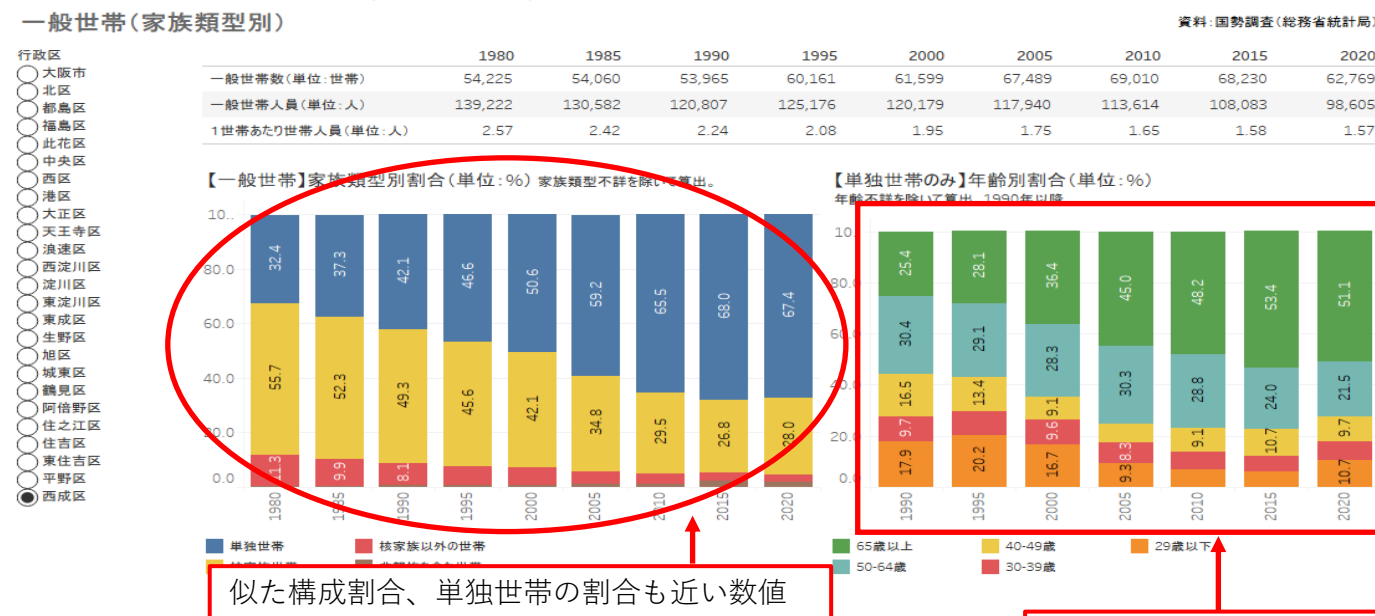
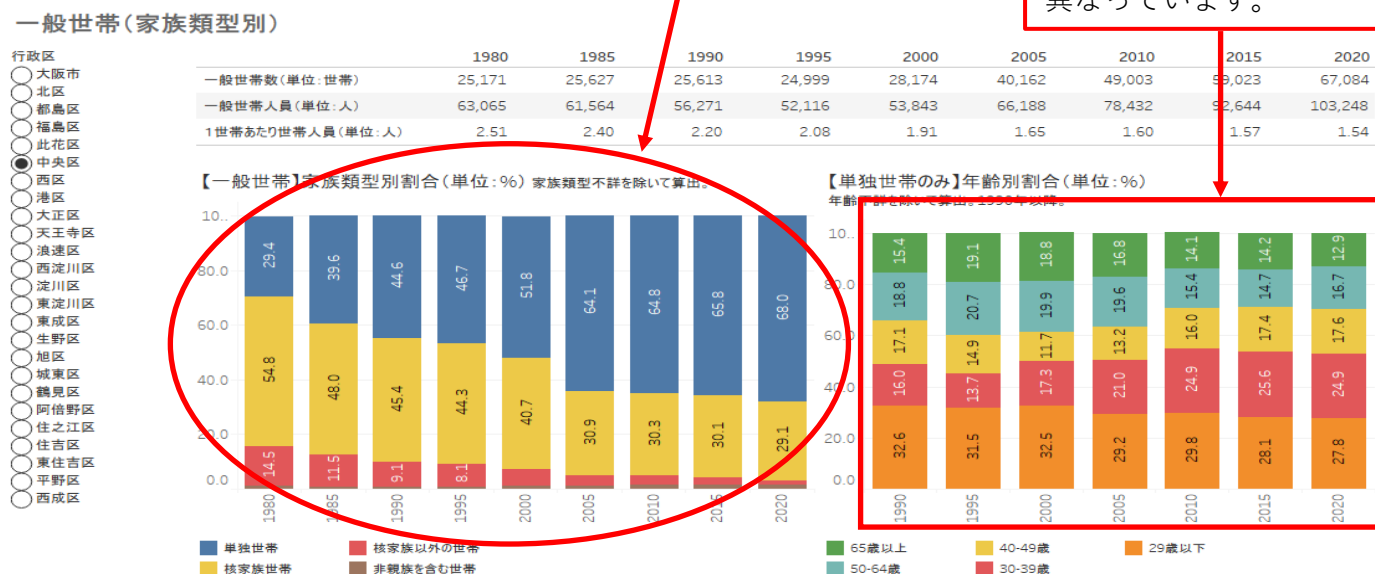


図10（再掲） 中央区の一般世帯（家族類型別）ダッシュボード



以上のように、「一般世帯（家族類型別）」のダッシュボードでは大阪市全体及び各行政区の一般世帯における世帯数・世帯人員・家族類型別の状況を確認することができ、時点による傾向の違い、行政区ごとの傾向の違いを確認すること等が可能です。